

令和2年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

(中間・最終)

呉中央中学校区 校番 13 呉中央中学校

| 重点 | d 中期(3年間) 経営目標 | e 短期(1年間) 経営目標 | l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます) | m 今後の改善策(案) (こう改善します(案)) |
|------|---------------------------------|--|---|---|
| *** | <p>① 生ききる根っこを育てる「豊かな学び」の創造</p> | <p>生徒が主体的に学び、思考力を育む授業改善を進める。 (教務)</p> | <p>「授業が分かる」と回答した生徒は、7年86%、8年88%、9年90%で、全体、各教科ともに目標値を達成している。特に9年生は前回よりも7%上がっている。しかし、7年生の数値が4%下がっており、学習への難しさを感じる生徒が増えていることが分かる。課題のある生徒への支援や課題解決型の深い学びができる授業過程の工夫が必要である。</p> | <p>課題解決型の深い学びができる授業について、各授業グループでの授業研究に取り組んでいる。引き続き、教職員で協働して授業改善に努めていく。また、主体的に学びに向かうことができるような課題設定も工夫していく。</p> |
| | | <p>個別支援プログラムを作成し、組織的に取り組む。 (学年)</p> | <p>通過率30%未満の割合が7年生では10%、8年生では12%、9年生が7%であった。9年生は受験もあることから、前回よりも30%未満の生徒が3%減っている。しかし、7年生が増えつつあり、学習内容が難しくなっていることも要因と考えられる。個々に対応した指導をより丁寧にする必要がある。</p> | <p>試験週間中の水曜日に数・英の試験において通過率30%未満の生徒を対象に放課後補充学習、秋から実施した9年生の放課後10分学習を継続していく。また、補充学習の内容や時間をより充実したものになるよう工夫していく。</p> |
| | | <p>家庭学習と授業との関わりを強め、自学自習のできる生徒の育成 (教務・学年)</p> | <p>目標時間の達成率は、2学期期末試験の1週間前からの調査で7年65%、8年58%、9年70%であった。全体的に家庭学習時間が少ないことが大きな課題である。生徒の実態に合った課題の提示など、学習の仕方の指導や個別の支援が必要であると考えられる。</p> | <p>家庭学習の仕方の指導や一人での学習が難しい生徒への個別指導を行う。また、『メディアコントロール・学習時間チェック』を来年度から導入させるタブレットで管理する。保護者へのメール配信で、引き続き協力を呼びかける。</p> |
| ** | <p>① 生ききる根っこを育てる「豊かな生き方」の創造</p> | <p>生徒の「心の居場所」がある学校づくりの推進 (学年・生徒指導)</p> | <p>学校行事の縮小や中止で学級活動が行えなかったが、前回より「自分には良いところがある。」と答えた生徒は全体で1%増えた。特に9年生では前回より10%高くなった。面接練習や進路学習での個別面談での生徒への声かけや肯定的評価が十分に行えた成果だと考えられる。</p> | <p>各学年の実行委員の活動、学級集団作りの活動、取組において、生徒が主体的に発案する場面を増やす。進路学習を早い学年で取り入れ、個別面談の時間を増やして、肯定的評価を増やしていく。</p> |
| | | <p>道徳教育の改善・充実を図り、自他の命を大切に育てる生徒の育成。 (教務・学年)</p> | <p>道徳の授業に対して肯定的な回答をした生徒は全体の84%で、前回に比べ、2%減少した。グループ討議が難しい現状があり、話し合うことで自分の考えを深めたり、広げたりするような時間が不足していることが原因として考えられる。</p> | <p>身近な課題で導入を工夫し、自己の生活に道徳科が生きていると実感できるような授業改善をする。また、自分の考えと他者の考えを比較し、振り返りながら考えるような場面を増やす。</p> |
| * | <p>① 生ききる根っこを育てる「しなやかな体」の育成</p> | <p>施設一体型小中一貫教育の強みを活かし、運動的諸活動の充実を図る。(体育科)</p> | <p>前年度よりも記録が伸びた生徒は、50m走では、男子90%、女子71%、20mシャトルランでは、男子55%、女子32%であった。平均では、男子72%、女子51%となる。男女ともに持久力に課題がある。コロナ禍における運動機会や持続的な運動の減少による持久力の低下、自分の限界まで粘り強く続けようとする精神面の弱さが見られる。</p> | <p>小中で課題を共有し、継続的な取組が必要である。運動への興味関心が高まるような活動を仕組み、自ら運動機会を増やしていこうとする生徒を育てる。また、持久走や補強運動を始め、日常生活においても、粘り強く努力して充実感や達成感を味わえるよう支援する。</p> |
| | | <p>施設一体型小中一貫教育の強みを活かし、運動的諸活動の充実を図る。(体育科) 家庭と連携を強化し、協働で生徒の成長を支える環境をつくる。 (学年・生徒指導)</p> | <p>朝食について肯定的な回答をした生徒は92%で、前回に比べ2%増加した。1月以降の登校時間の変更や懇談等で保護者への指導の成果と思われる。 遅刻については、97%目標達成できた。しかし学年別では、遅刻割合が7年生が0.8%、8年が4.2%、9年が4.3%と、8、9年生の数値が高い。毎日家庭連絡をしているが、遅刻が習慣化している生徒は固定化している。ゲームやメディアの使用等で生活習慣が乱れ、長欠生徒にあてはまる生徒も多い。睡眠の大切さを理解させ、メディアコントロールができる力をつけていく必要がある。</p> | <p>引き続き、家庭学習強化週間で起床、就寝、学習開始、メディア終了時間を把握するとともに、気になる生徒については懇談会等で家庭学習時間調査票やメディアコントロール取組表を保護者に見せ、家庭との連携を図っていく。 特にゲームやメディアの使用で生活習慣の乱れについては、スクールカウンセラーと連携を密にし、家庭への指導や助言をしていく。</p> |
| 業務改善 | <p>① 業務改善を進め、元気で明るい職場を実現する</p> | <p>生徒と向き合う時間を確保する。 時間外勤務の縮減を図る。</p> | <p>「向き合う時間が確保されている」と回答した教職員は68%で、中間報告時点よりも下回っている。 前期では時間外勤務は減っていたが、後期に入り時間外勤務が増えた。コロナレベルに合わせた対応の協議等、作業や会議が増えたことが要因と考えられる。</p> | <p>スクールサポートスタッフの活用方法を工夫・改善する。 業務の集中を改善し、内容の精選、分担の再編成を図る。 退校時間の個人内目標を設定・実践する。</p> |